

兵庫県の介護福祉学生の喫煙に関する実情調査

北川 泰子・村上 淳子

A Survey of the Smoking Habit among Human Care and Welfare Major Students in Hyogo Prefecture

Yasuko KITAGAWA, and Junko MURAKAMI

Human care and welfare major students, 91 at university level and 53 at vocational school level in Hyogo Prefecture, responded to a questionnaire concerning cigarette smoking. Among males, 32% of the university and 44% of the vocational school were habitual smokers. Among the students who take regularly 3 meals a day, smokers were few.

In awareness of the health damage caused by smoking, non-smokers have a more concerned and correct understanding than those who smoke.

Key words : No Smoking, Meals, Cigarettes, University-students, Vocational-school- students
禁煙指導, 食事, たばこ, 大学生, 専門学校生

はじめに

私たちのキャンパスでは喫煙学生を多く見かけるが、これは全国的なことのようで、苦慮の様子がうかがえる報文を見かける^{1)~6)}。

1999年(平成11年)度の日本たばこ産業株式会社の調査によると⁷⁾、わが国の15歳以上の国民1人当たり年間喫煙本数は3,240本で、世界の先進国中で最も多く、たばこの販売総本数は7年連続して前年を上回った。また、「1996年(平成8年)度未成年者の喫煙行動に関する全国調査報告書」によると、高校3年生男子の25%、女子の7%が習慣的に喫煙しているという。

がん死亡率は1981年(昭和56年)以来死因の第1位となり、なかでも気管・気管支および肺がん死亡率の増加は目を見張るばかりで⁸⁾、たばこががん死亡要因の30%を占めるといわれるのを⁹⁾納得せざるを得ない様相である。このような状況を反映してか、病院の“禁煙外来”は全国に250余箇所も開設されていて¹⁰⁾多くの禁煙希望者を受け入れ、また、禁煙希望者を支援するインターネット¹¹⁾や携帯電話のシステム¹²⁾などが

成果をあげているとの報告がある。

私たちも何らかの方法で喫煙学生を減らすことに参与したいので、その手始めに担当クラスの学生の実情調査を行って見たところ、教育上参考となる知見が得られたので報告する。

対象および調査方法

対象は兵庫県内のK大学介護福祉学科1年生94名(アンケートの提出数は91名、回収率97%)、およびH介護福祉専門学校1年生55名(提出数は53名、回収率96%)の計149名(提出数144名)である。無記名とし、K大学は2000年(平成12年)9月、H専門学校は同年10月に実施した。

表1は、学校別男女別年齢区分である。K大学生はほとんどが20歳未満であるのに対し、H専門学校生には年齢層のばらつきがある。

居住形態はK大学生は男、女ともに68%が寮生または下宿生であるが、H専門学校生はほとんどが自宅に居住している。

表1 学校別男女別年齢区分 人

	K大学		H専門学校		合 計		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	計
20歳未満	36	46	6	15	42	61	103
20~25歳	8	1	11	4	19	5	24
26~30歳	0	0	4	3	4	3	7
30歳以上	0	0	4	6	4	6	10
計	44	47	25	28	69	75	144

結 果

1. 喫食状況について

「あなたは3食をほぼ規則正しく摂っていますか」の問いには、K大学生男子の57%・女子の45%が、H専門学校生男子の28%・女子の36%が「いいえ」と答えた（不規則喫食者）。また、不規則の内容はほとんどが朝食抜きであった。

表2は、不規則喫食の頻度で、「週5回以上」がK大学生男子では9名（36%）、H専門学校生男子では2名（29%）で、不規則喫食男子の3人に1人は、ほぼ毎日朝食抜きであることが分かった。

2. 好きな間食について

規則的に食事をする者と不規則な者との間に、好きな間食の種類に差があるかどうかをみるために、好きな間食を3品目書かせたが、両群ともにアイスクリーム、スナック菓子、洋菓子の嗜好がみられたが、特に差異は見出せなかった。

3. 喫煙状況について

「あなたはたばこを吸いますか」の問いで、K大学

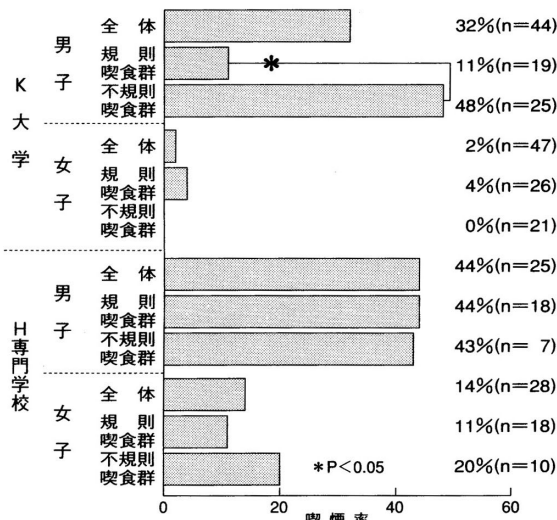


図1 学校別・性別および規則喫食・不規則喫食群別喫煙率

生男子で3人に1人（32%）、H専門学校生男子では2.3人に1人（44%）の喫煙者がいることが分かった。K大学生女子では少ないが、H専門学校生女子は、日本女性の平均値14%⁷⁾とほぼ同率であった（図1）。

現在の非喫煙者の中には、K大学生男子30名中6名・女子46名中4名、H専門学校生男子14名中5名・女子24名中3名の、過去に喫煙していたが今は止めている者が含まれている。

K大学生は表1のとおりほとんどが20歳未満であるが、H専門学校生は年齢のばらつきが大きいので、年齢別にみると、20歳未満では男子の33%・女子の7%、20~25歳では男子の45%・女子の25%、26~30歳では男子の25%・女子の67%、30歳以上では男子の75%が喫煙者であった。

4. 喫食状況と喫煙状況の関連について

「ほぼ規則正しく食事を摂っている」と答えた者（規則喫食群）と、そうでない者（不規則喫食群）とに分けて、その喫煙率をみると、K大学生男子では、統計的に明らかに規則喫食群に喫煙者が少なかった（ $p < 0.05$ ）。H専門学校生女子にも同様の傾向がみられた（図1）。

5. 喫煙開始時期（喫煙者対象）について

表3は「いつ頃から喫煙していますか」との問いで、かなり低年齢、つまり、中学生頃から喫煙していたことが分かった。特に、K大学生男子はほとんどが高校卒業以前からの喫煙者であった。

表2 不規則喫食の頻度 人 (%)

	K大学		H専門学校	
	男子	女子	男子	女子
週1~2回	4(16)	11(52)	3(42)	2(20)
週3~4回	11(44)	6(29)	2(29)	6(60)
週5回以上	9(36)	4(19)	2(29)	1(10)
無回答	1(4)			1(10)
計	25(100)	21(100)	7(100)	10(100)

表3 喫煙開始時期 人 (%)

	K大学		H専門学校	
	男子	女子	男子	女子
小学生	1(7)		1(9)	
中学生	5(37)	1(100)	2(18)	1(25)
高校1年	3(21)			1(25)
高校2年	1(7)		2(18)	
高校3年	3(21)			
高校卒業後			6(55)	2(50)
無回答	1(7)			
計	14(100)	1(100)	11(100)	4(100)

介護福祉学生の喫煙実状調査

6. 現在喫煙しているたばこの量（喫煙者対象）について

1日の喫煙本数は、K大学生男子は72%が、H専門学校生男子は55%が1日に16本以上を喫煙していることが分かった。女子はほとんどが15本以下であった。

7. 喫煙のきっかけ（喫煙者対象）について

「喫煙を始めた時のきっかけはなんですか」の問いには、「友達と冗談で吸い始めたら止められなくなった」「先輩にもらって」などの交友関係をあげた者が多い。いろいろな感の解消、好奇心、大人ぶりなどもあった。

8. 禁煙経験の有無（喫煙者対象）について

「今までに禁煙しようと思ったことがありますか」との問いには、K大学生の喫煙者15名中12名（喫煙男子の79%・喫煙女子の100%）が、H専門学校生の喫煙者15名中6名（喫煙男子の27%・喫煙女子の75%）が「はい」と答えていて、過去に禁煙しようとしたことがあることが分かった。

上記の禁煙しようとしたことがある者に「その時どんな行動をしましたか」と問うと、量を減らした、スポーツをした、一度禁煙成功などの答えが多く、そのようにして一度は禁煙に成功したが、結果的には現在も喫煙していることが分かった。

9. 現在、どんな理由で喫煙しているか（喫煙者対象）について

「今、どんな理由で喫煙していますか」の問いには、気分転換、精神安定、なんとなくが多く、「背丈を縮めるため」という意外な答えもあった。

10. 禁煙についての将来の見通し（喫煙者対象）について

「今は喫煙しているが、将来禁煙しようと思えますか」の問いには、K大学の喫煙者15名中13名（喫煙男子の86%・喫煙女子の100%）が、H専門学校の喫煙者15名中8名（喫煙男子の45%・喫煙女子の75%）が「禁煙したい」と答えている。一方、「禁煙しない」と答えた者もK大学生男子に2名（14%）、H専門学校生男子に6名（55%）・女子に1名（25%）いた。

11. いつ頃禁煙するつもりか（喫煙者対象）について

前項で禁煙したいと答えた者21名に、その予定時期について「卒業するまでに」「結婚するまでに」「その他」を選ばせると、「卒業するまでに」「結婚するまでに」が計17名（81%）と多かった。理由は「体のことを考えて」がK大学生に6名（46%）、H専門学校生に7名（88%）いたが、「記載なし」もそれぞれ7名（54%）と1名（12%）あった。

表4 たばこの害についての認識

人（%）

	K 大 学				H 専 門 学 校			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
	喫 煙	非喫煙	喫 煙	非喫煙	喫 煙	非喫煙	喫 煙	非喫煙
肺がん	8(19)	18(20)		37(27)	8(35)	10(36)	2(30)	23(42)
その他のがん	8(19)	11(12)		8(6)			1(14)	6(12)
成長抑止					1(4)	1(4)	1(14)	1(2)
呼吸器障害	6(14)	6(7)		7(5)	4(17)	1(4)		4(8)
ニコチンの依存性		2(2)		1(1)				
胎児の催奇形性		4(4)						2(4)
脳への悪影響		2(2)		3(2)		1(4)		
肌荒れ					2(9)	1(4)	1(14)	1(2)
体力低下	1(2)	8(9)		7(5)	1(4)	3(11)		2(4)
血管障害	2(5)	2(2)		3(2)				
血圧亢進					2(9)	2(7)		2(4)
貧血							1(14)	
ヤニ菌	1(2)	1(1)		4(3)				2(4)
食欲減退		2(2)			2(9)	1(4)		2(4)
寿命短縮	1(2)	3(3)		2(1)	2(9)	1(4)		4(8)
味覚異常						1(4)	1(14)	
他人への迷惑	3(7)	11(12)		16(12)	1(4)	3(11)		3(6)
不経済				1(1)				
火事の原因		1(1)						
記載なし	12(30)	19(21)	3(100)	49(35)		2(7)		
延回答数	42(100)	90(100)	3(100)	138(100)	23(100)	27(100)	7(100)	52(100)

12. たばこの害の認識について

表4は「たばこの害を3項目書いてください」の回答をまとめたものである。その内容を喫煙者と非喫煙者で比較すると、次のとおりであった。

- 1) 「肺がん」「その他のがん」についてはどちらも同じくらいの回答があった。
- 2) 「ニコチンの依存性」「胎児の催奇形性」「脳への悪影響」については非喫煙者のみが回答していた。
- 3) 「他人への迷惑」については非喫煙者の方に回答数が多い。
- 4) 3項目すべてを記入せず空欄を残している者は、喫煙者の方が多い。
- 5) 呼吸器障害をあげている者は男子では喫煙者の方が多い。

13. 副流煙に対する認識について

「副流煙とはなんですか」の問いの正解者は、K大学生では男、女ともに非喫煙者に多かったが、H専門学校生は男、女ともに喫煙者に多かった。

14. 緑黄色野菜について

「緑黄色野菜を3つ書いてください」の問いに、ほとんどの学生に正解が多かったが、誤りは男子に多かった。

15. 緑黄色野菜とたばこの関係について

「緑黄色野菜とたばこの関係を書いてください」の問いには「分かりません」との記載や、記載なしが多く、「たばこの害を抑える」「がんを予防する」は記載していたが、「疫学的にみると緑黄色野菜の摂取の多い人はたばこを吸っていても肺がんの罹患率が低い」¹³⁾と記載している者はなかった。

考 察

1999年(平成11年)国民栄養調査によると¹⁴⁾、わが国の20歳代男性喫煙率は56.3%、女性16.0%である。大学生低学年男子は20%~30%、女子は10%以下と推定され³⁾⁶⁾¹⁵⁾、本調査K大学生男子32%、H専門学校20歳未満男子33%・女子7%はほぼ同率であるといえる。しかし、年齢が進むにしたがって増える傾向があり¹⁵⁾¹⁶⁾、H専門学校生でもその傾向が強いので、新入生に対し全学をあげての啓蒙につとめる必要がある。もちろん、K大学生喫煙者のほとんどが高校3年までに喫煙を開始していることを考えあわせると、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国なみの国をあげての禁煙対策^{17)~19)}が必要であることはいうまでもない。

つぎに、「3食をほぼ規則正しく摂っている学生に喫煙者が少ない」という結果は、3食を摂るという生活習慣がしっかりと身につけている者は、たばこの害にも敏感で、有害な喫煙はできないという保健上のポリシーが確立できているものと考えられる。包括的な健康教育の中での禁煙教育でなければならないことが分かった。

たばこの害についての記述では、自由に3項目ずつ記入させたが、「肺がん、その他のがん」は、喫煙者、非喫煙者ともにほとんど全員が記入していたにも関わらず、喫煙者には「他人への迷惑」をあげた者が少なく、「ニコチンの依存性」「胎児の催奇形性」を記載した者が1人もいなかった。ここから、喫煙者の他人への配慮に欠ける独り善がりな考え方が垣間見られるのではないだろうか。人間教育、人格を高める教育が必要であることが分かった。

「呼吸器障害」をあげた者が喫煙者に多かったのは日常の体験上からの回答と思われ、このあたりを指導の切り口にすることも1つの方策であると考えられた。

本調査では、過去において喫煙していたがその後禁煙した者は、K大学生10名(現在の非喫煙者の13%)、H専門学校生8名(現在の非喫煙者の21%)の計18名であり、また、現在は喫煙しているが1度は禁煙しようとかの行動をした者はK大学生に12名(現在の喫煙者の80%)、H専門学校生に6名(現在の喫煙者の40%)あり、現在は喫煙しているが、将来は禁煙しようと思っている者が喫煙者30名中に21名(K大学生喫煙者の87%、H専門学校生喫煙者の53%)いることが分かった。

ニコチンガムは年内に米ファルマシア社の“ニコレット”が薬局で販売される予定であるし²⁰⁾、ニコチンパッチは開業医も処方箋を書いてくれるようになりつつある²¹⁾ので、そのような情報を流し、適当なアドバイスをすることによって禁煙に踏み切らせる余地があると考えられた。

大島は「禁煙は1にも教育、2にも教育²²⁾」といっているが、特に、福祉を専攻する立場から考えても禁煙への努力が必要であることなどにも言及して、手近かなところからの教育、啓蒙を始めたいと思う。

まとめ

大学介護福祉学科1年生91名と介護福祉専門学校1年生53名計144名のアンケート調査の結果、次のことが分かった。

- 1) 大学生の約半数と専門学校生の1/3が朝食を摂っていない。

- 2) 男子は、大学生の32%、専門学校生の44%が喫煙をしている。
 - 3) 大学生男子で定期的に3食を摂っている者には喫煙者は少ない。
 - 4) たばこの害については非喫煙者のほうが広範囲の知識を持っている。
 - 5) 過去に喫煙していたが禁煙している者は、非喫煙者計114名中18名であった。
 - 6) 現在は喫煙しているが、将来、禁煙しようと思っている者は喫煙者計30名中21名であった。
- 以上のことから、特に、福祉を専攻する立場から考えても禁煙への努力が必要であることを提言し、教育する余地があると考えた。

文 献

- 1) 川上幸三：高校生の喫煙行動とその意識。北海道教育大学紀要，3(1)，1982
- 2) 斎藤麗子：増加する女子学生、未成年者の喫煙。保健婦雑誌，4(4)，289-294，1988
- 3) 古田真司：未成年女子の飲酒と喫煙行動に与える要因の検討。学校保健研究，31(5)，235-243，1989
- 4) 加来和子：青森県の学校における禁煙教育の現状と課題。弘前大学教育学部紀要，63，33-49，1990
- 5) 和泉光則：学生の喫煙と学内マナーに関するアンケート調査。北海道東海大学教育開発研究センター所報，9，73-81，1996
- 6) 山田 剛：大学生の受動喫煙が不快感と健康に及ぼす影響に関する研究。http://www.Osaka-kyoiku.ac.jp/yamakawa/yamada.htm
- 7) 厚生統計協会：国民衛生の動向。厚生 の 指標，47(9)，89-91，2000
- 8) 国立がんセンター情報委員会：http://www.info.ncc.go.jp/statistics/stats1999/japanese/figures/f3-j.html
- 9) Doll R.&Peto R.: The causes of cancer ; Quantitative estimates of avoidable risks of cancer in the United States today. J.Natl. Cancer Inst., 66, 1191-1308,1981
- 10) 大阪がん予防センター：http://www.iph.pref.osaka.jp/OCPCDC/clinics/08.html
- 11) 高橋裕子：タバコを止められないあなたへ。東京新聞出版局，東京，2000
- 12) 朝日新聞：禁煙，携帯でサポートします。2000年（平成12年）12月31日，大阪朝刊
- 13) 平山 雄：たばこの身体に及ぼす影響。若さの栄養学協会，第14回栄養学連続講義テキスト，89-105，1984
- 14) 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室栄養調査係：平成11年国民栄養調査結果の概要。栄養日本，44(4)，19-33，2001
- 15) 東京大学保健センター健康管理室：1997年学生喫煙調査。http://www.hu-tokyo.ac.jp/uthealth/frame1.htm
- 16) 川根博司，松島敏春，副島林造：当大学における医学生の喫煙状況。川崎医学，23(4)，235-240，1997
- 17) 岩井和郎：喫煙の医学的問題-内外の研究の展望。財団法人結核予防会，228-230，1981
- 18) WHO：Smoking and Its Effects on Health. WHO Technical Report Series No.568(Geneva),1975.平山雄，厚生省公衆衛生局(訳)：たばこの害とたたかう世界-WHO専門委員会報告，財団法人結核予防会，東京，1976
- 19) 野上浩志：喫煙の公衆衛生対策。生活衛生，28(6)，352-358，1984
- 20) 日本経済新聞：禁煙ガム一年内にも国内で市販。2001年（平成13年）2月18日，朝刊
- 21) 高橋裕子：禁煙支援ハンドブック。株式会社じほう，東京，2000
- 22) 大島 明：第55回日本公衆衛生学会総会報告。1996